



旧商家丸一本間家



増毛小学校の外観と体育館内部。
体育館の屋根と天井は三角形を基本とした木造トラスで組まれている



夏の穏やかな浜風が、潮の香りとカモメの鳴き声を街角まで運んでくる。石造りや木造の建物の色あせた地肌が、日本海の厳しい風雪に耐えた時間の長さを物語っている。

ここは留萌管内増毛町。甘エビやサケ、ニシンの漁場としてにぎわった漁業の街だ。1751（宝暦元）年に和人が定着したとされる。北海道遺産に指定された街並みを眺めながら、街が最も栄えた明治と昭和初期を想像した。

JR留萌線の終点、増毛駅わきの建物に「風待食堂」の看板がかかる。高倉健さん主演「STATION」（81年）の舞台にもなった1933（昭和8）年建築の老舗、多田商店だ。現在は観光案内所としても利用され（春と秋）、期間中は「STATION」のステール写真が展示されている。

駅前通りの交差点に立つ「旧商家丸一本間家」は1881（明治14）年、佐渡出身の豪商、本間泰蔵が建てた石造りの呉服店舗。凝った造りの店

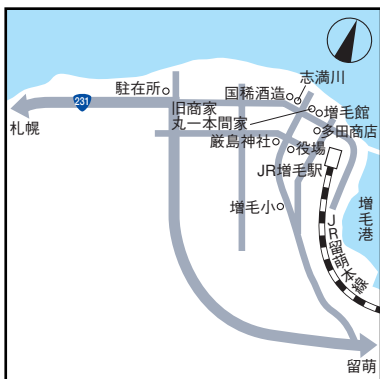
舗や客間、通り庭はすっかり復元されていて、ニシン漁や海運、不動産業まで手がけた本間家の栄華がしのばれる。

さらに西側へ歩くと、紺色の大きな布に大きく白抜きで「酒」の一字が躍る、すっきりした木造建築。創業120年になる国内最北の造り酒屋「国稀酒造」だ。ここでは、暑寒別岳（1491メートル）の水が生んだ銘酒の利き酒や酒造り道具の見学を楽しめる。

街を一望する小高い丘に登ると、町立増毛小学校の校舎がどしりと構えている。1936（昭和11）年の建築当初の姿のまま、今も児童約200人が通っている。木造2階建て約3500平方メートルと、道内に残る木造の小・中学校校舎では最も広い。

このほか、いまでも営業している旅館「増毛館」や食堂「志満川」、華やいだ造りの増毛厳島神社など、レトロな趣が街のあちこちに散らばっている。

Data



●お問合せ先

増毛町企画財政課企画係

Tel.0164-53-1111

町は旧商家の丸一本間家を4億円かけて購入・復元し、00年から一般公開している。しかし、建物群全体を保全する資金は町にない。当面、観光客が訪れやすい基盤づくりを進める考えだ。

ハード面では、建物群が集まる道道わきの歩道約450メートルを整備する。段差をなくして拡幅し、街路灯を設置して「ふるさと歴史通り」と名づける。04年度にも完成する見通しだ。また、同町の2大イベント、5月のえびまつりと10月の秋あじまつりで、ポスターに「北海道遺産」のロゴを印刷し、町のイメージアップを図った。会場から建物群へのシャトルバスも運行している。

ただ、こうした動きとは裏腹に数年前、昭和初期の商業建築が取り壊され更地となった。建物群の多くは民間が所有するため、保全運動に限界があるのも現実だ。